

# 「初期青銅器弥生時代」の提唱

## 鉄器出現以前の弥生時代

A Proposal of the Pre-Bronze Age of the Yayoi Period:  
The Yayoi Period Before the Appearance of Iron Tools

藤尾慎一郎

FUJIO Shin'ichiro

はじめに

- ①新石器時代設定の経緯と内容
- ②縄文文化は日本の新石器文化なのか
- ③弥生時代と鉄器時代との関係
- ④弥生文化とブリテン・韓半島の先史時代
- ⑤新石器時代と鉄器時代の間に来るもの
- ⑥九州北部以外の地域の状況

⑦結論

おわりに

### 【論文要旨】

本稿は、二次利用された青銅器片が石器にわずかに伴う九州北部の弥生早期～弥生前期後半段階が、森岡秀人のいう「新石器弥生時代」に相当するのかどうかについて考えたものである。

弥生時代は始まった当初から石器に鉄器が伴う金石併用段階にあり、初期鉄器時代から鉄器時代に相当すると認識されてきた。しかし2004年に、鉄器は水田稲作が始まってから約600年後の弥生前期末になって出現することが明らかになると、森岡秀人は金属器がなく石器だけの弥生早・前期が新石器時代に相当すると考え、弥生早・前期を「新石器弥生時代」と規定した。

しかし弥生早・前期の灌漑式水田稲作は選択的生業構造のもとで行われているので、網羅的な生業構造のもとでアワ・キビ栽培が行われた韓半島南部新石器時代と同じ新石器段階にあるとみことは難しい。韓半島南部において弥生早・前期と生業構造が同じ段階にあるのは青銅器時代以降だが、弥生早・前期には遼寧式銅剣の破片を再利用して作った矢じりなどがわずかに存在する程度で、青銅器の副葬も始まっていないので、これまで青銅器時代にはあたらないと考えられてきた。もともと日本の水田稲作は、遼寧式青銅器文化圏にあった韓半島南部に隣接する九州北部玄界灘沿岸地域において始まった。まだ遼寧式銅剣は出土していないが、私たちはこの地域に青銅器を象徴としていた人びとが存在したことを示す複数の考古学的証拠を見ることができる。

検討の結果、ヨーロッパでは石器と青銅器を併用する段階を新石器時代末期、あるいはまだ冶金技術が知られていない銅石時代とよんでいるので、弥生早・前期を「初期青銅器」段階と捉えることにした。

したがって弥生時代は、遼寧式青銅器文化圏にあった韓半島南部に隣接する九州北部において初期青銅器段階として始まり、前期末に初期鉄器段階、中期後半以降に本格的な鉄器段階へ移行する。【キーワード】新石器弥生時代、初期青銅器弥生時代、鉄器弥生時代、網羅的生業構造、選択的生業構造

## はじめに

本州・四国・九州の先史・原史文化のなかでも、縄文文化、弥生文化、古墳文化という文化はそれぞれの文化名称が土器の文様、最初に弥生式土器が発見された遺跡の所在地、古墳という遺跡の種類といった日本考古学独自の用語に由来するため、これまでもヨーロッパの先史・原史文化の何に相当するのかという点について多くの議論が行われてきた。

なかでも弥生文化については、2003年に水田稲作の開始年代が大幅にさかのぼり、鉄器のない段階が、弥生早期から前期末までのおよそ600年間も続いたことが明らかになって以来、森岡秀人は弥生時代の独立性や区分原理に関する積極的な発言を続けている〔森岡 2004, 2007, 2008, 2018〕。なかでも、森岡の「新石器弥生時代」に関しては筆者もたびたび紹介しながら、弥生時代を2期4小期に分けて、森岡の弥生時代の細分との対応を試みてきたが〔藤尾 2019〕、本稿はこの見解を一部修正して発展させたものである。

C・トムセンが先史時代を斧などの利器の材質を基準に、ヨーロッパ(スカンジナビア)先史時代を石器時代、青銅器時代、鉄器時代の3つに分けた三時期区分法は、その後の研究の過程で石器の製作技術の違いや土器の有無などの技術的側面、採集・狩猟段階か農耕・牧畜段階かといった経済的側面、都市や戦いなどの有無といった社会的側面を指標に、各時代の特色が明確にされてきた。

そのうち石器時代は地質年代、石器製作技術、土器や農耕の有無によって、旧石器時代、中石器時代、新石器時代の3つに分けられた。なかでも新石器時代は地域によって環境や生態系が少しずつ異なるために、新石器文化という同じ名称がついていても、内容はかなり異なっており、環境や生態系ごとに特徴をもつ多様な新石器文化が存在するというのが実態である<sup>(1)</sup>。

筆者もこれまで「四大文明」が興った地域の新石器文化と、文明の中心から遠く離れたブリテン島などの新石器文化との間に大きな違いがあることを指摘したことがある〔藤尾 2002〕。

新石器時代というとG・チャイルドの新石器革命が有名であるが、日本では佐原真が縄文時代から弥生時代への転換を食糧採集段階から食糧生産段階への転換と捉え、弥生時代のはじまりを新石器革命に相当すると考えたことがあった〔佐原 1975: 115頁〕。しかしその反面、佐原は弥生時代は「日本で金属器(鉄器・青銅器)が初めて製作・使用された時代である。」「同 115頁」とし、金属器の製作が弥生時代の大きな特徴と考えていたことがわかる。また弥生時代には青銅器が祭器・礼器・装飾品として鉄器と使い分けられていたことが、トムセンの鉄器時代そのものと言えると指摘した〔同書 116頁〕。このように新石器革命に相当すると考える一方で、当初から鉄器が存在した弥生時代を新石器時代として扱うことは適当でないとし、青銅器時代でもなく、鉄器時代に相当するというのが佐原の弥生時代観であった。

しかし農業の開始と鉄器の使用開始が同時ではないことがわかった現在、佐原の定義にしたがえば鉄器が出現する前期末以前の弥生時代は鉄器時代には相当しない。では森岡秀人の言うように新石器時代なのであろうか、それとも佐原が否定した青銅器時代なのであろうか。

こういう問い自体があまり意味はないと思われる研究者も多いことだろう。地球上に石器→青銅器→鉄器時代と変遷する地域がどのくらいあるのか、疑問だからである。それでも博物館で弥生文

化を展示する場合においては、諸外国の観覧者に日本の先史時代を理解してもらうために、先史・原史時代を区分する場合、もっとも一般的な三時期区分法と、どのように対応するのか、を示すことは必要なことと考えている。

韓国の先史・原史時代は、ヨーロッパと同様、旧石器→新石器（櫛目文土器時代）→青銅器（無文土器時代）→初期鉄器・鉄器時代（原三国時代・三国時代）として区分されていて、隣接する日本列島の先史・原史時代とさえ正確に対応させるのは難しい。たとえば韓半島の新石器時代にはアワ・キビ農耕がすでに行われているが、縄文時代にアワ・キビ栽培が行われていたことを示す考古学的証拠は最終末を除いてない。また韓半島には鉄器が出現する前に600年以上続いた青銅器時代があるが、日本では鉄器出現以前に青銅器自体がほとんど存在しない。このように隣国とさえ異なっているのであるから、ましてやアジアや欧米の観覧者にとって日本の先史・原史文化を理解するのは容易ではないだろう。したがって、鉄器出現以前の弥生時代をもっとも一般的な三時期区分法と対応させると、何時代に相当するのかについて改めて考えることにする。

まず、①で「新石器時代」設定の経緯と内容について整理したあと、②で縄文時代と新石器時代との関係について述べ、③では森本六爾から森岡秀人までの研究者が日本の先史・原史文化と新石器文化・青銅器文化・鉄器文化との対応についてどのように発言してきたのかについて検討する。④では紀元前4世紀（前期末）以前の、鉄器がまだない段階の日本の水田稲作文化の特徴について述べ、⑤で鉄器が出現する以前の弥生時代早～前期が韓半島や三時期区分法の何に対応するのかを考える。⑥では九州北部以外の弥生文化は何に対応するのか考えることにする。

## ①……………新石器時代設定の経緯と内容

### 1. 設定 ——技術様式と動物相——

新石器時代設定の経緯については以前にも述べたことがあるが〔藤尾 2003〕、簡単に振り返っておく。石器時代という用語はデンマークのC・トムセンに始まるが、石器時代を旧石器と新石器の2つに分けたのはイギリスのJ・ラボックである。ラボックは石器時代を、絶滅動物とヨーロッパを共有していたときの堆積物の時代（地質学的定義）と、それより新しい磨製石器の時代（石器製作技術の違い）の2つに分けることで、旧石器時代と新石器時代に分けた。

絶滅動物とはかつての洪積世、今の更新世の最終氷期まで生きていたマンモスやオオツノジカなどの絶滅大型哺乳類を指す。当時の旧石器と新石器との区分は、地質学的定義と石器の製作技法の違いという2つの基準で行われていたものであり、そもそも農業の有無といった指標では分けられていなかった。

### 2. 農業と結びついた新石器時代

ブリテン島の代表的な新石器時代の遺構として有名な巨石記念物（モニュメント）を造ったのは誰なのかをめぐる議論の中で、新石器時代と農業は結びついていく〔藤尾 2003〕。モニュメントは巨大な石などで造られた構造物で、ヨーロッパの新石器時代～青銅器時代～鉄器時代にみられる。

おもなものに大土籬（ヘンジ）、円・長形墳（ラウンド・ロングバロウ）、積石塚（ケルン）などがある。

19世紀のブリテン島の人びとは、巨石記念物を造った人びとがどのような暮らしをしていたのかという点に関心があり、このような壮大な人工物を造ることができる人びとは、農業を行っていたに違いないと考えていた。進化論全盛時代ならではの考え方であると言えよう。

その後ブリテン島の新石器時代は、磨製石器を用いて農業を行い、巨石記念物を造る時代と定義されるとともに、エジプトのピラミッドにルーツをもつ巨石記念物が西ヨーロッパに伝播した際、農業とともに中東から西ヨーロッパへと伝播してきたと考えられるようになる。

### 3. チャイルドの新石器革命 ——農業が新石器時代の指標に——

2.で述べたように新石器時代と農業が間接的に結びついていた段階から、一気に農業の時代へと結びつけるため、全面的に舵を切ったのがG・チャイルドである。巨石記念物を造った人びとが農業を行っていたという認識から大きく踏み出し、農業の開始を新石器時代開始の指標（メルクマール）としたのである。ここに新石器時代は、磨製石器や完新世の堆積物の時代、巨石記念物の時代から、農業の開始という経済的側面の違いで旧石器時代と区別されることになり、石器製作技術など技術史の区分から生産様式など経済様式の違いに基づく歴史区分（時代区分）へと転換したのである。現在、石器時代は旧石器・中石器時代（完新世の定住しない採集狩猟民＝forager）など採集・狩猟の時代と、新石器時代という農業の時代の3つに分けられている。

チャイルドのいう新石器時代の農業の内容を、西アジアのオオムギ・コムギ農耕を例に見てみると、弥生時代の灌漑式水田稲作のような継続的なものではなく季節的なものに過ぎず、牧畜を行ったあとでその糞尿を肥料として用いる半農・半牧の「畜養的耕作」であった〔チャイルド1936〕〔福津1942〕。季節的で粗放な農耕であり、かつ農耕社会の成立を示すような要素は見られない。たとえば土地はまだ不足していなかったし、戦争の存在を示す証拠もない。しかしその一方では耕作と牧畜の開始によって自給自足が可能になるとともに過剰的蓄積が起こり、萌芽的な交易の基礎ができるなど、弥生時代の灌漑式水田稲作の結果、見られるようになる要素が見られたり、また見られなかったりで、完全には一致しない。

いずれにしても全体的にみると弥生時代の灌漑式水田稲作の開始後、100年ぐらいたったあとに起こる社会の質的変化<sup>(3)</sup>に比べると、西アジアの新石器時代農業の開始によって起こる変化は、そこまでは至っていないことはだけは確かである。

以上のことから、チャイルドが新石器革命の根拠とした西アジアの新石器時代の農業は、時代を画する経済的転回（過剰的蓄積）が起こるとはいいながらも、戦いなど社会の質的变化を示す現象が起こっていないなど、弥生時代の灌漑式水田稲作に比べてかなり原初的な農業であることがわかる。

### 4. ブリテン島の前期新石器時代の農業

ブリテン考古学界でも1980年代の終わりごろから前期新石器時代農業の再検討が始まり、その実態が明らかになってきた。

J・トーマスは、ブリテン島の前期新石器時代が農業社会と考えられる根拠となった考古学的証拠である、植物遺体、農耕具、畑などの遺構、家畜飼育の実態、石器の様相などを再検証した。その結果、ブリテン島の前期新石器時代にコムギやオオムギなどの穀物が栽培され、ウシやブタなどの家畜が飼育されていたとしても、いずれも日常的に食されていたというよりは、儀礼食として位置づけられていた可能性がある」と結論づけた。しかも一箇所に定着して栽培・飼育を継続したというわけではなく、定期的に移動しては儀礼を行う場所に戻ってくるという生活であったと結論づけた [トーマス 1991]。

このようにブリテン前期新石器時代の穀物栽培も、弥生時代の灌漑式水田稲作とはかけ離れた存在であったことがわかる。

## 5. 弥生文化は新石器文化といえるのか

チャイルドの畜養的耕作やブリテン島の前期新石器時代の農業は、弥生時代の灌漑式水田稲作どころか、定住が本格化した縄文早期以降のあり方とも異なっている。それでもトーマスが前期新石器時代を新石器文化と定義したのは、新石器時代の指標を経済的転回として位置づけたチャイルド説を採るのではなく、新石器時代の要素（土器）と中石器時代の要素（定住しない採集狩猟民：forager）が混在する状況こそ前期新石器時代段階であると判断したからである。いわゆる移行期として位置づけ、本格的な新石器時代である後期新石器時代へ移行すると考えるものである。

トーマスの結論は、新石器時代を穀物栽培と家畜の飼育が始まった時代として捉え、文化的・社会的革新は農業を始めなければ起こらないと考えたチャイルドの新石器革命論からの脱却に他ならない。

西アジアの畜養的耕作もブリテン島の儀礼のための穀物栽培やウシ・ブタの飼育も、弥生時代の灌漑式水田稲作の開始に伴って起こるような戦いや農耕社会の成立が意味する社会の質的変化を引き起こさないことがわかった。このことから金属器がないという理由で、穀物栽培の実態や、それが引き起こす社会の変化がまったく異なる弥生早期～前期後半を「新石器弥生時代」とよぶことがふさわしいのかどうか、もう一度検討することが必要であろう。

弥生早・前期が新石器時代相当でないとすれば、蔬菜類やマメが栽培されている縄文時代が新石器相当なのであろうか。次章で縄文文化とブリテン新石器文化などヨーロッパとの関係について論じた研究を見てみよう。

## ②……………縄文文化は日本の新石器文化なのか

### 1. 縄文時代の植物栽培

チャイルドが規定した新石器時代と縄文時代との関係を考える場合、もっとも焦点になるのは農業の有無である。チャイルドが新石器革命論を提唱する以前だったら問題はない。たとえば濱田青陵は1922年に新石器時代を次のように定義している。「新石器とは、世界が動物界其の他に於いて、現今の状態と大差なき時代に作られた石器を云う。」 [濱田 1948: 55-56 頁]。具体的な石器としては

打製石器と磨製石器を想定し、弓矢とともに石鏃、磨製の石斧、石庖丁のような、またその顕著なる遺物となす、とした。なお、この定義に農業は含まれていない。濱田は日本の石器時代は、この新石器時代に属するとしている〔同書：56頁〕。濱田のいう石器時代（縄文土器の時代）とは、後氷期以降（現縄文早期以降）の縄文時代に相当する<sup>(4)</sup>。ではチャイルド以降はどうなったのであろうか。

チャイルドが農業のはじまりを指標に経済的転回として位置づけた新石器時代は、日本の弥生時代に該当すると佐原が考えた理由は、弥生時代に日本で食糧生産を基本とする生活が始まったことこそ新石器革命に相当すると考えたからである。弥生時代が「日本で食糧生産を基礎とする生活が開始された時代」という佐原の定義〔佐原 1975：114頁〕から見ても明らかである。しかし佐原が縄文時代の農耕を否定していたのかといえそうではない。生業全体に占める農耕の割合を問題にして縄文時代の農耕と弥生時代の農耕を区別していたのだ。そしてその考えは当時の多くの研究者に共通していたのである。

小林達雄は、単独でなくても良い特定種を一定の範囲のところで栽培・管理することが、生業の中で相当のウェイトを占め、継続することを農耕の条件としている〔佐々木・木村 1988：347-350頁〕。林謙作も農耕が主要な生業になっている社会を農耕社会と定義している〔林 1992〕。

つまり縄文時代に穀物栽培があったとしても「採集、狩猟、漁撈活動のごく一部を補う程度」の役割を果たすものだとすれば、状況は先ほどのブリテン島の前期新石器時代にみられた儀礼食を得ることを目的とした穀物栽培の位置づけと似ている。

縄文時代の植物栽培を生業のごく一部とみる考え方は、縄文時代を農耕を含む採集狩猟経済段階、弥生時代を稲作農業を生産基盤とする生産経済の段階と認識していた森本六爾までさかのぼるので、縄文・弥生時代の農業に関する研究の伝統的な考え方であることがわかる。

このように考えれば、穀物ではないにしても植物栽培を行っていて、それが生業全体のごく一部でしかない縄文時代も、ブリテン前期新石器時代と共通するので、社会の質的変化を起こさないような植物栽培であれば、新石器文化と見なしても問題ないと考える。早期以降、栽培種であるヒョウタンやエゴマなどを作り、野生マメのドメスティケーションや栽培を行っていた可能性のある縄文時代前期以降の場合も同じ理由で新石器文化とみてよいことになろう。

以上の議論は、文明の中心から遠く離れたブリテン島のような地域における新石器時代の定義に、日本の状況をあてはめるとすればどうなるのか、という議論である。次に、縄文文化を日本列島特有の新石器文化として位置づけようとした今村啓爾の「森林性新石器文化」についてみてみよう。

## 2. 今村啓爾の森林性新石器文化

今村啓爾は世界の新石器文化を3つに分けている〔今村 1999〕。まず四大文明地では完新世が始まり気候が温暖化するにあたって、草原に自生する野生ムギ類や野生コメなどの採集、そして栽培によって温暖化に適応しようとした。これを「草原性新石器文化」と名づけた。

次に東南アジアのような低緯度地帯では、完新世以降の温暖化の影響がそれほどでもなかったために、急激な変化を起こさなかったとして特に新しい文化名称を設定していない。

では日本列島や北東アジアのような中緯度地帯に暮らす人びとは完新世以降の温暖化にあたってどのように適応したのであろうか。今村は、森林のドングリ類や根茎類などに依存する点に注目し

て「森林性新石器文化」となづけ、例として青森県三内丸山遺跡にみられるようなクリの管理栽培などをあげている。

また今村は、森林性新石器文化と弥生文化との関係について、森林性新石器文化は縄文中期末の寒冷化にあたって寒さに強い耐寒性のクリを作ることができなかつたことなどをみても、縄文人は自然の摂理を管理することはできなかつた。そのために、歴史の次の段階である都市生活や階級関係の発生をみることはなかつたと述べている。つまり森林性新石器文化は最終的に水田稲作の開始によって終わりを告げるのである。

一方、草原性新石器文化の対象である一年生のイネ科植物は突然変異を起こしやすく、自然に品種改良が進んだため、対温、対日照時間など、当時の技術でも適応することができた。これがイネ科の野生植物が自生した旧大陸の「四大文明」地と、イネ科の野生植物がなかつた日本列島との違いであり、この違いに起因する歴史の転回の有無はまさしく自生する野生植物の生物学的特徴が一役買っていたといえる。

弥生文化は、完新世に穀物（イネ）栽培を選んだ地域（中国）、水田稲作を生産基盤とする社会や青銅器文化を韓半島南部から移入することによってうまれたものであった。しかも弥生時代の灌漑式水田稲作はすべての生業のなかでも、突出して選択的な位置づけにあった。縄文時代から弥生時代への転換を経済的側面からみれば、甲元真之のいう網羅的生業構造から選択的生業構造への転換〔甲元 1991〕と捉えられる。穀物栽培を行っていたとしても、歴史を次の段階に転回するためには網羅的生業構造から選択的生業構造へ転換し、そのなかでコメを作ることが必要だったのである。

### 3. 今村による日本の先史時代の世界史的対応

2004年、今村は、縄文時代は旧石器文化、中石器文化、新石器文化の3つの段階に分けて考えることができるという見解を示した〔今村 2004〕。1999年に青森県大平山元Ⅰ遺跡で晩水期の土器がすでに見つかったことで、土器の出現が約3,500年さかのぼることは2004年の段階で知られていた。一方、2004年はレプリカ法による調査が始まる前ということもあり、まだ多くの研究者は縄文後・晩期にイネ、アワ、キビなどの穀物栽培が補助的に行われていた可能性があると考えていた。また水田稲作の開始年代が紀元前10世紀までさかのぼる可能性があることは発表されていたものの、弥生時代の前半の約600年間は石器だけの段階であることはまだ確定していない。2004年とはそういう段階にあるので、そのことを念頭において今村の見解をみてみよう。

今村は、自身の考え方を従来の概念にできるだけ忠実に準拠しながら比較する立場にあるとした上で、世界の考古学で一般に使われているのと同じ意味で日本の旧石器時代や新石器時代も定義するという立場である。ブリテン島などで一般的に使われている定義とは地質学や食糧生産の有無を指標に、更新世に属する旧石器時代、完新世で食料生産を行っていない中石器時代、完新世で食料生産を行う新石器時代（森林性新石器文化）の3つである（図1）。

そのうえで、「結局、日本の時代区分や日本の歴史の独自性に適合する「先土器時代」—「縄文時代」—「弥生時代」とすべきで、「縄文時代」を西欧あるいは世界の定義に無理にあてはめようとするなら、年代的にはなく金属器出現以前の先史時代である「旧石器時代」「中石器時代」「新石器時代」の3つにまたがって対応することになる。」〔今村 2004: 57頁〕と結論づけた。ただし、日本の

地質年代	更新世		完新世					
考古事象	絶滅した大型哺乳類の時代		定住	土器の出現 農耕の開始	青銅器 の出現	鉄器の 出現		
ブリテン	旧石器		中石器	新石器	青銅器	鉄器		
何年前	16,000		11,000	6000	4000	3000		
日本	先土器旧石器	旧石器 (土器有)	中石器	森林性新石器			?	初期鉄器
	旧石器	縄文					弥生	
	後期	草創期	早期	前期	中期	後期	晩期	早期 前期 中期

図1 日本の先史時代概念図〔今村2004〕をもとに作成)とブリテン先史時代の比較

場合、中石器時代（完新世で農耕のない時代）と新石器時代（完新世で農耕の時代）の境界はぼやけたものにならざるを得ないという。

つまり今村が先に示した森林性新石器文化は食料生産段階にあるという位置づけなので、縄文前期以降は確実に新石器時代ということになるだろう。また土器が出現する縄文草創期は晩氷期にあたり世界的には土器のある旧石器時代となり、土器のないそれ以前の旧石器時代（先土器時代）とは区別される。また森林性新石器文化が本格化する以前の縄文早期は中石器時代相当となるが、定住しているのでその境界は斜めの点線で示したようにぼやけたものになり区別することはできない。

また弥生時代について今村は、チャイルドの新石器革命にあたるが、水田稲作の開始と同時に鉄器が存在するので初期鉄器時代に相当すると位置づける<sup>(6)</sup>。

今村は初めて縄文時代のなかを新石器段階とそれ以前の旧石器・中石器段階に分けて考えることを示すと同時に、日本列島型の新石器文化として「森林性新石器文化」を設定したのである。

#### 4. 野生マメ類のドメスティケーション

縄文時代の植物栽培は1970年代以降、ヒョウタンやエゴマなどの野菜類が知られるようになったが、メジャーフードとなりそうな栽培植物は知られていなかった。そうした中、ここ10年で注目を集めるようになったのがマメ類である。縄文人が小粒の野生のマメ類を大型化させていた可能性が出てきたのである。アズキやダイズの野生種であるヤブツルアズキやツルマメよりも大形で、現生のアズキやダイズよりは小形のマメが縄文時代に存在したことがレプリカ法の調査によって明らかになってきたからである。いわゆる「縄文マメ」といわれているもので、寒冷化すれば一般に大型化するらしいが、これがもしドメスティケーション（野生種を栽培種にする行為）によって大型化したのであれば、縄文時代初のことである。

縄文マメの存在を明らかにしたレプリカ法とは、次のような方法である。縄文人が土器を作る過程で、まだ粘土が軟らかい段階で行う生地作りや粘土紐を積み上げる成形段階に、植物の種子や昆虫が粘土にくっついたり生地に練り込まれたりすることがある。土器の表面にはたくさんの凹みがあるが、凹みがどのようにしてできたのかを調べるために、土器の表面の凹んだ穴に樹脂を埋め込み、固まってから取り出すと、接着面に植物や昆虫の文様を写し取ることができる。この文様を電子顕微鏡で観察して調べれば、もとは何がついていたのかを知ることができるのである。



中山誠二や小畑弘己等の研究によって、縄文人がおよそ1万年ほど前から野生のヤブツルアズキやツルマメを採集し始め、数千年にわたって利用する過程で、野生種と現生種（ダイズ・アズキ）の間ぐらいの大きさをもつ、いわゆる「縄文マメ」が誕生していた可能性が出てきたのである。

縄文人は完新世以降の温暖化とともに新たな食料源として草原性植物である野生のマメ類の利用を始め、数千年にわたって利用していく過程で種子の大型化が自然に進んでいた可能性がある。ただ残念なことに、マメ類は炭水化物が豊富なメジャーフードたり得る植物ではなかったため、縄文人は野生のイネ科植物を選んだ旧大陸の四大文明地の草原性新石器文化の人びとと同じような歴史的転回を歩むことはなかった。

## 5. 縄文文化と新石器文化との関係

縄文文化と新石器文化との関係について見てきた。温暖化した完新世以降に堅果類や根茎類などの森林性植物を選択し、メジャーフードとした北東アジアの列島上に花開いた新石器文化の1つが縄文文化である。堅果類はメジャーフードたり得る食糧源だが、以下の理由から次のような歴史的転回を遂げることができなかった。それは堅果類が草原性の一年生イネ科植物に比べて、3つの点で栽培が難しいといわれているからである。第1に堅果類は食べられる実をつけるようになるまで、クリでも3年かかるなど成長が遅く、普通は10年以上たないと実が成らないものがほとんどである。よって一年で収穫できるイネ科植物よりも長い時間がかかる。第2に野生の一年生イネ科植物のように希望する特性を有する個体を選抜栽培できる確率が低い。たとえば穀物は栄養がすべて種子にいくようになっているが、多年生の堅果類は葉や幹にも栄養がいくようになっているため、実だけに栄養を行かせることができないなどである。最後に堅果類の苦みは複数の遺伝子でコントロールされているために、苦みのない個体を得ることがきわめて難しいことである。以上の点から、自然の摂理を超えて堅果類をメジャーフードとして利用した農耕へと進むことはなかったと考えられている。

現状において日本列島最古の確実な穀物の証拠は、鳥根県板屋Ⅲ遺跡で出土した紀元前11～前10世紀前半の縄文晩期最終末の前池式土器の甕に着いていたコメの圧痕である。もし将来的に穀物の証拠がこれよりさかのぼったとしても、網羅的な生業構造のもとで行われた穀物栽培という位置づけが変わることはないであろう。このような理由から、穀物栽培が選択的生業構造のもとで特化した弥生時代前半の600年間を、鉄器が伴わないという理由で網羅的生業構造の縄文時代と同じ新石器時代として位置づけることは難しいと考えるのである。この問題は④章でさらに検討する。

したがって、本州・四国・九州においては森林性新石器文化段階にあたる縄文時代早期～縄文時代晩期末（1.1万年前～3千年前）こそが、後氷期適応した新石器時代に相当することになる（図2）。

ただ北海道や沖縄、そして九州南部はやや異なる。約1.5万年前に温暖化が始まり照葉樹林が広がる九州南部では、縄文草創期後半から晩期末までが新石器時代に相当して、それ以前は土器のある旧石器相当ということになる。土器の出現が9千年前からで、堅果類が本州ほど発達しない北海道では、1.6万～1.1万年前は土器のない更新世の旧石器時代、1.1～9千年前は土器のない完新世の中石器時代、土器出現以降はイノシシや堅果類などに依存する森林性新石器文化である。沖縄（北琉球）では土器が出現する約1万年前〔山崎 2017〕以降が森林性新石器時代、石器は見つか



図2 韓半島と日本列島における完新世の諸文化（約7000年前）

の弥生文化に関する研究史を見ることによって、弥生時代が新石器時代から外れるとすればどのように位置づけられてきたのか、みてみることにする。この問題は弥生文化と鉄との関係をめぐって議論されてきた点にほぼ集約されるといってよい。

## ③……………弥生時代と鉄器時代との関係

### 1. 弥生式土器と鉄器との関係

弥生時代が三時期区分法の何に相当するのかを考える際のポイントとなるのは鉄器との関係である。明治5年の東京・大森貝塚の調査によって、高塚古墳が造られた時代の前に石器時代があったことが確認される。高塚古墳は天皇家の祖先のお墓なので、古墳を造った人びとは農業を行い鉄器を使っていたと考えられていた。それに対して、石器時代の人びとは農業も行わず鉄器も使用せず、石器だけを使って採集・狩猟を行っていた野蛮で未開な先住民と考えられた。そこに農業を行い鉄器を使う天皇家の祖先がやって来て、先住民を東や北へ追いやって古代日本を作ったという図式は、まさに『記』『紀』の神話の世界そのものであった。

このような歴史観の中、明治17年に東京帝国大学の構内で見つかったのが、のちに弥生式土器と命名されることになる土器である。人びとの関心は新たに見つかった土器が石器時代の土器なのか鉄器時代の土器なのかにあった。なぜならそれを知ることは弥生式土器の使用者が先住民なのか、天皇家の祖先なのかを決めることを意味したからである。論争の結果、鉄器時代の土器に近いということで決着し、先住民の土器ではなく天皇家の祖先の土器に近いと考えられるようになる（図3：明治）。

ていないもののそれ以前は土器のない旧石器段階に相当しよう。約7千年前に始まったサンゴ礁の形成以降は海への依存度が高まってくる。そして本州・四国・九州の大部分は今村の言うとおりの、土器のない旧石器段階（先土器時代）と、完新世以降で土器はあるが農耕のない中石器段階、そして縄文早期の森林性新石器文化以降の新石器段階と、3つに分かれることになる。

そして当初から選択的生業構造にある弥生時代は、新石器時代からは外れることになる。

次に弥生式土器の発見から現在

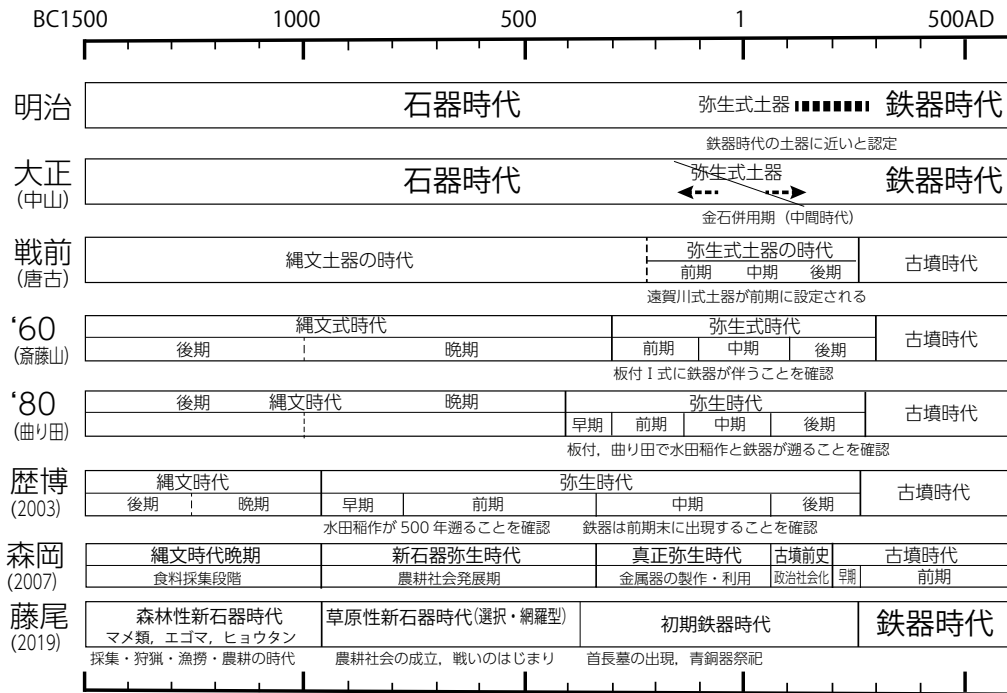


図 3 弥生式土器の発見から弥生長期編年までの年代観の変遷

20 世紀になると、愛知県熱田高蔵貝塚の調査で磨製石斧や石庖丁などの農耕関係の石器が弥生式土器に伴うことが明らかになるが、これは弥生式土器を使う人びとが石器を使用し農耕を行っていた段階があったことを意味することになるので（角田文衛の言う弥生式石器時代 [角田 1959]）、弥生式土器が鉄器時代の土器に近いという定義と矛盾する。鳥居龍蔵の「固有日本人論」はこの状況を矛盾なく説明するための学説であった。

大正時代になると、中山平次郎が弥生式土器にコメが伴うことや、福岡市板付田端遺跡において弥生式土器である甕棺から銅剣・銅矛・鏡などの青銅器が出土することを確認し、弥生式土器に農業や金属器が伴うことが初めて明らかになる。これらの調査結果をもとに中山は、石器時代（貝塚土器 = 縄文土器）から鉄器時代（古墳時代）への移行期として「中間時代」ともいうべき金石両様の利器が同時に使われていた段階があったと考えた [中山 1917]。中山は先史時代と原史時代を 3 つの時期に分けている。第一期は純然たる石器だけの時代で、いわゆる石器時代である。弥生式土器も鉄器も存在せず、土器は縄文土器だけが存在する。第二期は金石併用の時代という石器時代と鉄器時代の「中間時代」にあたり、土器は弥生式土器だけが存在し、石器と鉄器が使われる（図 3：大正）。第三期は純然たる金属器の時代でいわゆる古墳時代が相当し石器も弥生式土器もない。つまり中山の中間時代とは、石器時代（先史時代）と鉄器時代（原史時代）が併存していた期間が存在し、弥生式土器はその期間内に使われた、という考え方の提示であり、石器時代と鉄器時代の間に独立した金石併用時代があったことを意味しているのではないことに注意する必要がある。

また青銅器が伴った板付田端遺跡は現在の弥生中期初頭以降に相当する。しかものちに小林行雄が遠賀川式土器と名づける前の話で、中山は第一系（須玖式）が第二系（有文土器）より古いと考えていた。となれば、中山説では弥生式土器は当初（板付田端遺跡の段階）から必ず金属器が伴って

いることになり、九州北部には石器単純段階の弥生式土器はないことを意味していた<sup>(6)</sup>。

弥生前期設定以前の大正期における弥生式土器と金属器との関係は、当初から石器と金属器が共存する金石併用期であり、それは石器だけを使う先住民と石器と鉄器と弥生式土器を使う日本人の祖先がともに暮らしていた時期があったことを示す考古学的な証拠でもあったのである。

## 2. 森本六爾と山内清男の弥生式土器の時代

中山平次郎が弥生式土器の使われていた時代を石器時代と鉄器時代が時期的に重なる金石併用段階（中間段階）として以降、弥生式土器の時代が日本の古代史上、どのように位置づけられるのかをめぐる研究が始まる。なかでも1930年代に行われた森本六爾と山内清男の論争が有名である。

なぜなら二人の金石併用段階に関する認識は祭祀的側面と経済的側面において大きく異なっていたからである。なお、1930年代にはすでに安満B類土器が近畿でもっとも古い弥生式土器として設定され、前期も含めた弥生式土器の時代の全期間が石器と鉄器が並存する金石併用段階として位置づけられていた。

青銅器を代表とする祭祀的側面について、森本は中国からの伝播によって初めて弥生式土器の時代に青銅器が現れることを重くみて、トムセンが提唱する青銅器時代に相当すると考えた〔森本編 1929〕。弥生式土器の時代の青銅器文化は、漢の青銅器文化圏の末端に属していたために、ヨーロッパや西アジアのように利器として存在したわけではなく、礼器や祭器として存在したことが最大の特徴と考えたのである。

一方山内清男は、青銅器が弥生式土器の時代に利器として使われていなかったことを重視して、トムセンのいう青銅器時代にはあたらないと考えた〔山内 1932〕。ヨーロッパ考古学の定義をそのまま日本の状況と比較し、それにはあたらずと理解したのである。

次に経済的側面に関する弥生式土器の時代の考え方の違いである。森本は水田耕作という農業は、弥生式土器の時代において社会的には支配的な生産手段であり、この時代の社会現象も農業が経済的に支配したと認められると述べる〔森本 1934〕。森本は縄文土器の時代も中期を過ぎると水田稲作とは異なる原始的な農耕が副次的に存在したものの、社会を経済的に支える生産手段ではなかったという点で、弥生式土器の時代の水田稲作と縄文土器の時代の原始的な農耕を明確に区別していることがわかる。

一方、山内は、片刃石斧を鋤〔山内 1932〕、石庖丁を鎌とする弥生式土器の時代の農耕を「<sup>どうこう</sup>耨耕」と位置づけ、牛馬を用いた鉄犁による耕作を行う古墳時代の農業と区別した。耨耕とは女性や子供の仕事として行われた程度の農業のことである。山内は、縄文土器の時代は自然界から食物を採集するだけと考えていたので、縄文土器の時代を採集経済段階、弥生式土器の時代は農業、狩猟、採集等が行われた段階、古墳時代は農作物を主とする生産経済段階と考えている〔山内 1932〕。

二人の論争は1938（昭和13）年から始まった奈良県唐古遺跡の調査で決着がついた。唐古遺跡の調査では水田跡こそ見つからなかったものの、定型化した大陸系磨製石器や木製農具が弥生前期からそろっていることが確認されたので、弥生式土器の時代は弥生前期から本格的な農業の時代であったことが明らかになる（図3：戦前：唐古）。また前期に鉄器が存在した可能性も指摘されているので、弥生式土器の時代は前期から金石併用段階にあることも再確認されていた。弥生式土器の

時代が農業社会であり、支配的な生産手段が農業であったと考えた森本の理解が正しかったことが証明されたのである。

弥生式時代前期が鉄器と石器を併用する金石併用段階であったことは唐古遺跡の調査で明らかになったが、前期の当初からそうだったのかどうかはわかっておらず、戦後の調査に持ち越されることとなる。また戦前、小林は古墳の出現年代を3世紀までさかのぼると考えていた。弥生式土器の時代は漢代までさかのぼると考えられていたので、弥生式時代は前2～前1世紀に始まったと考えられていた時代である。

### 3. 最古の弥生式土器に伴う鉄器の確認 ——熊本県斎藤山遺跡の調査——

1950年代に弥生開始期の諸問題を解決する目的で九州北部で行われた一連の発掘調査で、最古の弥生式土器である板付I式が設定されるとともに、熊本県斎藤山遺跡で板付I式に鉄器が伴うことが確認されたことによって、弥生式時代はその当初から金石併用期であることが初めて明らかになった(図3: '60 斎藤山)。杉原荘介は「弥生時代の開始されたことは、また日本において金属器時代が始まったことを意味する。」[杉原 1961:18頁]と書いている。つまり角田文衛がいうように、「弥生式石器時代」から石器がとれて金属器を持つという「弥生式時代」が一般化したのである[角田 1959]。ただ青銅器は弥生前期末にならないと出現しないこともあって、弥生式時代は鉄器が青銅器よりも先に出現する世界で唯一の先史文化として、考古学のみならず東洋史や日本史などの研究者の注目も集めることとなった。

農業のはじまりと鉄器の使用開始が同時で、しかも鉄器が青銅器よりも先に出現する先史文化は世界のどこにもなく、日本列島でしかみられないということ。また利器としての石器・鉄器と礼器・祭器としての青銅器が使い分けられていたことが、弥生式文化のきわめて重要な特徴であった。こうした現象が見られた理由は、弥生式文化がすでに鉄器時代に入っていた秦・漢を盟主とする東アジア青銅器文化圏のもっとも外側の世界で、外国文化の導入によって成立したことに求められた[石母田 1962][和島 1967]。

1950年代の一連の調査成果をふまえた考古学関連の講座本が1960年代になって次々に刊行される。『世界考古学大系』(平凡社)、『日本の考古学』(河出書房)、『新版考古学講座』(雄山閣)では、日本の先史・原史時代は、初めて旧石器時代、縄文式(石器)時代、弥生式時代、古墳時代という時代枠で整理され、弥生式土器の時代も開始当初から初期鉄器時代(金石併用期)という独立した時代としてはじめて記述されることになった。このころ弥生時代は前300年ごろに始まり後300年ごろに終わると考えられていた。

### 4. 佐原真のパラダイム転換 ——弥生時代の開始 = 新石器革命——

佐原真は、「日本で食糧生産を基本とする生活が始まった時代」「農業の開始や金属器の使用が始まってから階級社会が成立する時代」を弥生時代、その時代の文化を弥生文化、その時代に使われていた土器を弥生土器(弥生式土器から弥生土器へ改称)、という定義変更を行う[佐原 1975]。それまでは、弥生式土器の時代が弥生式時代であり、弥生式文化であった。角田が指摘した「生産経済の営為・冶金技術の採用・政治的社会的の成立」[角田 1959]という3つの指標で、佐原は弥生時

代を定義したのである。<sup>(7)</sup>ここに実質的な時代区分論争がスタートしたことになり、弥生時代は土器を指標とする技術史の時期区分（窯業史）から脱却するのである。

さらに佐原は、縄文時代から弥生時代への転換を、食糧採集段階から食糧生産段階への転換、すなわちチャイルドのいう旧大陸の新石器革命に対応すると理解した。この点については、先述したように、弥生時代は新石器時代と初期鉄器時代双方の要素を合わせ持つ、まさしく濱田のいう金石併用段階だったのである。

弥生時代の当初から西アジア新石器時代と鉄器時代の要素をあわせもつ状況は、日本列島がすでに鉄器時代に入っていた秦・漢（前3世紀）を中心とする東アジア文明圏のもっとも外側の世界において始まったことと無関係ではない。

## 5. さかのぼる鉄器の出現 ——金石併用期のはじまりが戦国時代までさかのぼる——

弥生時代前期の当初から金石併用期であるという認識は、1980年代に行われた福岡県板付遺跡や佐賀県菜畑遺跡の調査によって水田稲作の開始年代が100年あまり古くなり、縄文晩期後半の突帯文土器単純段階までさかのぼっても揺らぐことはなかった。福岡県曲り田遺跡の調査で、炭素量の低い鍛鉄製の鉄器が同じ時期までさかのぼったからである（図3：'80曲り田）。板付遺跡や菜畑遺跡で見つかった水田稲作は灌漑施設を備えた定型化したものだったため、1975年に食糧生産の開始や金属器の使用が始まってから階級社会が成立する時代を弥生時代と再定義していた佐原は、弥生時代の上限を縄文晩期後半の突帯文土器単純段階まで引き上げ、弥生先I期を設定した〔佐原1982〕。現在の弥生早期である。すると当然、鉄器の出現も弥生早期まで上がることになるので、弥生時代が早期の当初から金石併用期であることに変更はなかった。日本の鉄器の出現は紀元前5～前4世紀の戦国時代までさかのぼったのである。

佐原の提言を機に時代区分論争が80年代の半ばにかけて活発になる〔藤尾1988〕。弥生前期初頭の土器である板付I式が存在する九州北部の研究者のなかには、弥生早期説を認めずに縄文晩期後半に定型化した灌漑式水田稲作や鉄器の使用が始まり、環壕集落が成立し、戦いが始まること。板付I式以降に弥生時代前期が始まってから農耕社会が成立したと考える人が多かった。しかし単なる技術史の画期に過ぎない土器を基準にして研究史を遵守し、縄文晩期後半に食料生産段階に転換したと認識することは、時代区分の方法としては角田のいうように適切でないと考える〔角田1959〕。また弥生早期説を認めない場合、縄文晩期後半が初期鉄器時代（金石併用期）であることを意味し、初期鉄器時代に縄文土器があることにもなる。縄文晩期後半水田稲作開始説を採る研究者が、このことに対する説明も含めて中山平次郎以来の研究史との間で齟齬が生じることについてふれたことはこれまでない。この頃、古墳の出現年代が3世紀にさかのぼるといふ議論が始まっている。

## 6. 弥生時代の当初に鉄器はなかった ——石器時代から金石併用期へ——

2003年、筆者ら国立歴史民俗博物館（以下、歴博）の炭素14年代チームは、九州北部の弥生早期土器のうち、2番目に古い土器型式である夜白IIa式の甕の外面に付着した炭化物（スス）と、土器が出土した佐賀県梅白遺跡の水田に付属する水路に打ち込まれていた杭のAMS—炭素14年代測定を行った。その結果、杭が紀元前9世紀に伐採されたこと、ススの炭素14年代から夜白IIa

式は紀元前9世紀までさかのぼることを確認した。するともっとも古い弥生土器である山の寺・夜白I式土器は紀元前10世紀までさかのぼることを意味した。これはまさしく、日本の灌漑式水田稲作が紀元前10世紀に始まっていたことを示すと同時に、弥生時代のはじまりが紀元前10世紀までさかのぼることも意味していた（図3：歴博2003）。

最古の弥生土器が紀元前10世紀にさかのぼることになれば、最古の弥生土器に伴う曲り田遺跡出土の鍛造鉄器も紀元前10世紀にさかのぼることになり、日本の初期鉄器時代は紀元前10世紀に始まったことになる。しかしここで問題が生じた。東アジアの鉄の歴史を考えると、紀元前10世紀に鍛造鉄器が、いや人工鉄自体が日本列島に存在することはどうしても考えられないからである。

紀元前10世紀といえば、黄河中流域の中原でさえもまだ隕鉄製の鉄を部分的に用いた青銅製武器しかない段階である。また燕で炭素量の高い鑄造鉄器の本格的な生産が始まるのはどうみても紀元前6世紀をさかのぼることはない〔石川2017〕。したがって鑄鉄製の鉄器が紀元前10世紀の日本列島に存在し、普及していたとは到底考えられないのである。したがって曲り田遺跡出土の鉄器は紀元前10世紀に水田稲作が始まっていたという歴博の説が間違いであることを示す証拠として扱われた。

当時、弥生早期・前期の鉄器は曲り田遺跡から出土したのも含めて30点強あったため、これらの鉄器がどのような状況で出土したのか、春成秀爾や設楽博己が再検証を行った〔春成2004〕〔設楽2004〕。その結果、前期末に比定されていた2点の鉄器を除くと、弥生早期や前期後半以前に比定されていた鉄器は、土器との共伴関係が明確ではなく、時期を特定できないことが明らかになった。歴博は前期末を紀元前4世紀前葉に比定していたので、前期末以降であれば文明の中心から遠く離れた日本列島に鑄鉄製の鉄器が存在していても問題ない。弥生時代の鉄が中国の戦国時代にさかのぼることはすでに1960年代に確認されていたからである。

検討の結果、水田稲作が始まってから前期末までのおよそ600年間は、鉄器のない石器だけの時代ということになった。すなわち弥生土器にはその当初から鉄器が伴うという中山平次郎以来の考え方は否定され、弥生土器には鉄器が伴わない弥生土器と、鉄器が伴う弥生土器の二者があることが明らかになった。弥生時代は、その当初から金石併用段階にあるという中山説は否定されたのである。

## 7. 森岡秀人の「新石器弥生時代」の提唱

この状況に素早く反応したのが森岡秀人である。2004年には早くも世界史的観点からの見通しに言及し、「〔弥生時代〕という日本史上の枠組みは、時代区分として長い学史を背負うものの、現今ではその独立性や区分原理がやや硬直化し、さまざまな点でその有効性を失いつつあるかに見える。」〔森岡2004：89-90頁〕と述べ、今後の議論の方向性を示した。この論文は歴博が弥生開始年代遡上論を発表してすぐに書かれたものだけに、その対応の早さが注目される。

2007年になると森岡は、利根川以西の地域を対象に、弥生中期が相当する「真正弥生時代」を挟んで、弥生時代には、前期の農耕社会発展期と後期の政治社会化する時期（古墳前史）が存在すると主張した〔森岡2007：図3 森岡〕。

さらに2008年には、弥生時代の武器の材質変化に注目して、やや乱暴な言い方であると断りな

がらも、「弥生時代は打製・磨製の石器文化単独期（1・2期）と鉄器の浸透期（3期）に分かれるのであり、科学年代の普及は弥生時代を縄文時代の延長的体質・要素をもつ部分と、真正な部分を獲得した段階とに二分できる動きを支持する方向にある。」〔森岡 2008:582頁〕と述べ、石製武器だけの段階と鉄製武器を併用する段階に分けた。1・2期とは前期末以前、3期は中期中ごろから後半までを意味する。そして炭素14年代測定が普及すれば、弥生時代が石器だけの段階と鉄器が併用される段階の2つに分かれる動きを助長するだろうという見通しを示した。

もともと弥生前期という時期は、消えゆく縄文晩期的な要素と、新たに現れる大陸的な要素が融合して、新たな弥生的なもの、すなわち弥生中期文化が創造される段階に相当するが、森岡が前期末より前の段階を「新石器弥生時代」と定義したことが注目される。

森岡は、「新石器時代の下限は閉塞せず弥生時代に突入しても自然に継続しているから見なすべきであり、「弥生式石器時代」〔角田 1959:本稿9頁〕とはその実相を妙に言い当てた用語として、今日復権の余地がある」〔森岡 2008:584頁〕と述べている。

しかしもし森岡の発言が「新石器文化が縄文晩期から弥生前期後半まで自然に継続する」という意味であれば、慎重にならざるを得ない。なぜならば①章で述べたように西アジア新石器時代やブリテン島の前期新石器時代の農業の内容とその結果起こる社会の質的变化は、九州北部において灌漑式水田稲作の結果起こる社会変化とは質的にもかなり異なっているからである。自然に継続して起こる質的变化ではないからである。

2018年に森岡は、「今や金属製品をほぼ組み込まない段階の弥生文化が、農耕の導入を期日に一つの考古文化を維持している。北部九州の早期・前期、その他の地域の前期段階は、金属器がほぼ見当たらない農耕社会を形成しているのである。」〔森岡 2018:282頁〕と結論づけている。このことからわかるように、森岡の時代認識自体は賛同できるものの、弥生早・前期における弥生灌漑式水田稲作を経済的側面からみて縄文時代から閉塞せずに自然に続く新石器文化段階にあると考える点については検討する余地があろう。鉄器が存在する初期鉄器時代が始まる前期末まで約600年続いた水田稲作の時代は、果たして新石器段階なのであろうか、それとも別の段階なのであろうか。

そこで筆者は、森岡の指摘を受けて2017年に経済・社会・祭祀という3つの側面から、弥生時代早・前期がブリテンや韓半島の先史時代とどのように対応するのかについて検証した。

## ④……………弥生文化とブリテン・韓半島の先史時代

### 1. 3つの側面で2期4小期に

森岡が2007年に弥生時代を大きく3つの段階に分けたことを受けて〔森岡 2007〕、筆者も経済・社会・祭祀という3つの側面に注目して2017年に楽浪郡設置以前の弥生時代を2期4小期に分けた〔藤尾 2019〕（図3:藤尾）。まず九州北部では紀元前10世紀（早期前半）に灌漑式水田稲作が始まり、網羅的生業構造から選択的生業構造への転換という経済的な変化が起こることで縄文晩期と画すことができる。弥生時代のはじまりであり、今村啓爾の用語を適用して弥生早・前期を「草原性新石器文化」と呼んだ。



紀元前9世紀(早期後半)になると環壕集落の成立、戦いのはじまり、副葬品をもつ有力者の出現、格差の顕在化など社会に質的な変化が見られるようになる。また紀元前4世紀前葉(前期末)には燕系の炭素量の高い鑄鉄が出現するとともに、紀元前4世紀後半(中期初頭)には青銅器の副葬が始まるという祭祀的な変化が起こる。初期鉄器文化、金石併用段階のはじまりである。

紀元前3世紀半ば(中期中ごろ)には九州北部に鉄刃農具や袋状鉄斧などの韓半島南部産の鉄鉱石で作られた炭素量の低い塊煉鉄を素材とした鉄製利器が登場して、本格的な鉄器時代が始まる。なお、完全な鉄器時代とは石庖丁が消滅し鉄鎌への転換が進んだ古墳時代になってからと考える。

以上をまとめると、九州北部における楽浪郡設置以前の弥生時代は、まず紀元前4世紀前葉の燕系の鑄鉄の出現を境にⅠ期とⅡ期に大別される。Ⅰ期は経済的な画期で紀元前10世紀後半に縄文晩期と画されるA段階と、社会的な画期で紀元前9世紀後半に早期前半と画されるB段階に分けられる。Ⅱ期は、燕系の鑄造鉄器を木製品の細部加工など石器の補助として使用するA段階(紀元前4世紀前葉～)と、韓半島南部の炭素量の低い塊煉鉄を素材に作られた鉄製利器を本格的に使用するようになるB段階(紀元前3世紀中ごろ～)に分けられる。以下、詳細を説明する。

## 2. ⅠA段階 (草原性新石器文化：選択型)

この段階は、縄文晩期の森林性新石器文化が、紀元前10世紀後半に始まった灌漑式水田稲作によって終了してから、紀元前9世紀後半に環壕集落が出現したり戦いが始まったりするなどの社会的な質的な変化が始まるまでの約100年間である。灌漑式水田稲作は西アジアのムギ農耕や中原のアワ・キビ農耕と同じく一年生の草原性イネ科植物であるコメを対象とした農耕である点は変わらない。しかし九州北部においては灌漑施設を備えた水田でコメを栽培していることや、灌漑式水田稲作がすべての生業のなかで特化している選択型生業構造のもとで行われていることから、チャイルドが規定した西アジア新石器時代の畜養的耕作や、ブリテン島の前期新石器時代、および網羅的生業構造のなかでアワやキビを栽培していた韓半島新石器時代とは異なっている。そこで前稿[藤尾2019]ではこれらの網羅的生業構造のなかで行われた草原性新石器文化とは区別するために、ⅠA段階を草原性新石器文化(選択型)とよぶことにした。すなわち草原性新石器文化には、韓半島新石器時代のような網羅型と、弥生時代の灌漑式水田稲作のような選択型の二つを設定することで、西アジアやブリテン前期新石器文化との差別化を図れば、説明できると考えたわけである。

## 3. ⅠB段階 (遼寧式青銅器文化～多鈕粗文鏡 + 古式細形銅剣文化の末端に位置)

九州北部では、紀元前9世紀後半(早期後半)から紀元前4世紀前葉(前期末)までの間は、環壕集落の出現、戦いのはじまり、格差の顕在化、副葬品をもつ有力者の出現、武器形木製品を用いた儀礼など、社会の質的な変化で画期を認識できる段階である。利器は基本的に石器の段階であるが、わずかに青銅器の破片が存在する。ただし、冶金技術はまだ知られていない。

福岡県今川遺跡では紀元前8世紀末葉(前期前葉)に比定されている遼寧式銅剣の破片を再利用した銅鏃が、また北九州市上徳力遺跡では遼寧式銅剣の基部が出土していることから、少ないかも知れないが九州北部では韓半島南部と同様に遼寧式銅剣などの破片を再利用したものが使われていることが予想できる。このような状況は紀元前4世紀前葉(前期末)に出現する鑄造鉄器の破片を

再利用して木製容器の細部加工用として使った状況ほど大がかりなものではないにしても、石器の補助として金属器の破片を再利用したものが使われていたという点では質的に同じと考えることができる。

韓半島南部では紀元前6世紀中ごろ（弥生前期後半併行）から、多鈕粗文鏡と古式細形銅剣を象徴とする朝鮮式青銅器文化（武末純一の朝鮮青銅器文化2期）〔武末 2002〕が出現する（図4）。今のところ、遼寧式青銅器文化（武末の朝鮮青銅器文化1期）との関連を示すものは、九州北部のI B段階に今川をはじめ見つかっているが、武末の朝鮮青銅器文化2期との関連を示すような資料はI B段階には見つかっていない。また福岡県比恵遺跡で見つかった紀元前6世紀（前期後半）に比定される遼寧式銅剣を模して作られたと考えられる木剣が、木剣を使った模擬戦による儀礼の存在を物語るとすれば、九州北部においては儀礼・実用面にわたって青銅器が何らかの役割を果たしていたことは想像に難くない。青銅器文化圏にあった韓半島南部と、朝鮮海峡を挟んで隣接した九州北部の両地域に、同じ価値感を共有する人びとがいた可能性は十分に考えられる。

#### 4. II A 段階（朝鮮式青銅器文化・初期鉄器文化）

九州北部では紀元前4世紀後半（中期中頭）になると、多鈕細文鏡と銅剣・銅矛・銅戈を象徴とする朝鮮式青銅器文化（武末の朝鮮式青銅器文化3期）がようやく花開くとともに、円形粘土帯土器＋燕系の鑄造鉄器が出現して初期鉄器時代に入る。森岡の「真正弥生時代」の開始である。

しかし鉄器は木製品の細部加工に使われた程度で石器の補助的役割にとどまっていた。また紀元前3世紀（中期前半）には確実に青銅器の鑄造が始まっていて、前4世紀後半（中期中頭）まではさかのぼる可能性があると考えられている。

#### 5. II B 段階（朝鮮式青銅器文化・鉄器文化）

九州北部では紀元前3世紀半ば（中期中ごろ）を過ぎると、韓半島南部の鉄鉱石を原料とする低炭素の塊煉鉄で作られた鍛鉄が出現し、鋏先や鋤先として使われた鉄刃農具や袋状鉄斧が、徐々に利器として役割を担うようになり石器と交代していく。鍛錬鍛冶も始まるので初期鉄器文化から本格的な鉄器文化へ移行する段階として位置づけられよう。

### ⑤……………新石器時代と鉄器時代の間に来るもの

#### 1. 文明の中心から離れた地域の事例

1950年代の斎藤山遺跡の調査以来、水田稲作の開始当初から初期鉄器時代と考えられてきた弥生時代だが、生産経済段階にありながらも利器の主流は石器で、青銅器の再加工品がわずかに存在する段階が、400年あまり続くという弥生早・前期をどのように理解すればよいのか。生業構造が異なり、金属器がまったくない韓半島新石器時代と同質の新石器弥生文化の枠組みの中で捉えてよいのであろうか。また佐原が否定した青銅器段階ではどうであろうか。

そもそも「四大文明」地の青銅器時代は、国家形成期にあたる場合が多く文字も発明されるため

歴史時代に相当することもある。東アジアの夏や商もそうである。弥生時代が紀元前5～前4世紀ごろに始まったと考えられていた1980～1990年代は、すでに祭器としての青銅器、利器としての鉄器が使い分けられていた戦国時代の中国周辺で始まった弥生時代は、その当初から初期鉄器時代に相当した。

しかし、灌漑式水田稲作が始まって鉄器が現れるまでの約600年間にわたり遼寧式青銅器文化圏や古式細形銅剣文化圏にあった韓半島南部と接し続け、その影響で断片的に青銅器が存在することを考えると、やはり初期鉄器時代の前に東アジア青銅器文化のもっとも外側の世界で花開いた文化として新石器時代より歴史的ステップを一步進んだ段階が存在したと考えざるを得ない。可能性があるのは青銅器時代なので、まずは韓半島青銅器時代とヨーロッパの青銅器時代に目を向けてみよう。

## 2. 韓半島青銅器時代

武末純一の韓半島青銅器編年図に、較正年代（左列）と従来の考古年代（右列）を示したものである（図4）。

武末は、三期に分けている〔武末 2002〕。1期は遼寧式銅剣の段階で欣岩里式～松菊里式に相当、日本の黒川式～板付Ⅱa式に併行する。較正年代は前11～前7世紀に比定される。2期は古式細形銅剣の段階に相当、日本の板付Ⅱa式に併行する。較正年代は前7～前6世紀に比定される。3期は水石里式（円形粘土帯土器）～勸島式（三角形粘土帯土器）に相当、日本の板付Ⅱb式～須玖Ⅰ式に併行する。較正年代は前6世紀～前3世紀に比定される。

現在、韓半島南部における青銅器の出現は紀元前14世紀（青銅器時代前期）までさかのぼっているが（江原道アウラジ遺跡）、青銅器時代早期の青銅器はいまだ確認されていない。青銅器がないのに青銅器時代早期が設定されているのは、青銅器時代が韓半島南部における本格的な畑作農耕のはじまりを指標に設定されたものだからである（図5）。

紀元前15～前14世紀になると、中国北部から畑作農耕を行う人びとが南下してきて、畝だてを持ち数ヘクタールもある大規模な畑でアワ・キビ・マメ・コメ・ムギなどの栽培が始まる。大陸系磨製石器や石庖丁を持つ。早期の土器は突帯文土器を指標とし、もっとも古い漢沙里式土器は、前11世紀の前期の終わりまで続くことが知られているため〔李昌熙 2017〕、西日本の縄文晩期後半の突帯文土器の祖型と考えることも今や否定できない状況になってきている。

前13～前11世紀の前期になると、二重口縁土器（可楽洞・駅三洞）や孔列文土器（欣岩里）を指標とし、遼寧式銅剣を代表とする遼寧式青銅器文化の段階にはいる。紀元前11世紀には水田稲作が始まる。現在、韓半島南部でもっとも古い青銅器は先述した紀元前14世紀に比定されている江原道アウラジ遺跡から出土したリング状の青銅器である。そして前12世紀には遼寧式銅剣を副葬品として持つ有力者の墓が出現する。武末の韓半島青銅器第1期はまさにこの時期のことを指している。

紀元前10世紀後半に九州北部で始まった灌漑式水田稲作は、遼寧式青銅器文化を象徴とする先松菊里文化の人びとによってもたらされたものであるが、九州北部では紀元前8世紀までの約200年間、青銅器破片すら出土した例はない。まだ見つかっていないだけなのか、それともともと無いか、それを考える手がかりがある。

炭素14年代にもとづく較正年代

従来の考古年代

前11世紀	欣岩里式	1~6 比来洞 7~16 松菊里石棺墓 17~21 茂溪里 22~25 龍興里		黒川式	前9世紀	
前10世紀	休岩里式	40~41 大田槐亭洞 42 南城里 43 (伝)大田		1	山の寺式	
前9世紀後半		44~48・50・51 九鳳里 49・55・57 草浦里 52・53・56・58 大谷里 54 合松里 59~64 九政洞 65・67~69 入室里 66 平草里		期	夜白Ⅱa式 夜白Ⅱb式 板付Ⅰ式	600年ごろ 前4世紀後葉
前7世紀前半		1・21・39・40・69 土器 2~5・24・34・35 石器 12~15・25・36~38 玉類		2	板付Ⅱa式	前3世紀前葉
前6世紀	水石里式			期		
前4世紀後半				3	板付Ⅱb式 板付Ⅱc式 城ノ越式	前3世紀末
前3世紀後半	勒島式			期	須玖Ⅰ式	前1世紀前葉
前2世紀						前1世紀後半

図4 韓半島南部の青銅器編年 ([武末2002]と較正年代) ([藤尾2008] 図12より転載)

福岡市雑餉隈遺跡で見つかった前9～前8世紀の墓から、磨製石剣、磨製石鏃、小壺を副葬品に持つ人びとの木棺墓が複数、見つっている。同じ組み合わせの副葬品を持つ人びとの墓は韓半島南部でも見つっていることから、朝鮮海峡を挟んだ両地域に同じ副葬品の組み合わせを持つ人びとが存在したことがわかる。

韓半島南部には磨製石剣と磨製石鏃、小壺をもつ人びとの他に、遼寧式銅剣、磨製石剣、磨製石剣、管玉を副葬品としてもつ人びとがいる。遼寧式銅剣をもつ扶余松菊里遺跡1号石棺の被葬者と遼寧式銅剣をもたない被葬者の存在は、有力者層のなかにも序列・順位が存在した可能性を意味している。

もし九州北部に遼寧式銅剣を副葬品として持つ有力者が存在しないとすれば、九州北部に灌漑式水田稲作を伝えた青銅器文化の人びとは、韓半島南部において松菊里遺跡1号石棺の被葬者クラスの有力者ではなかった可能性が考えられないであろうか。それなら弥生早・前期に青銅器を副葬品

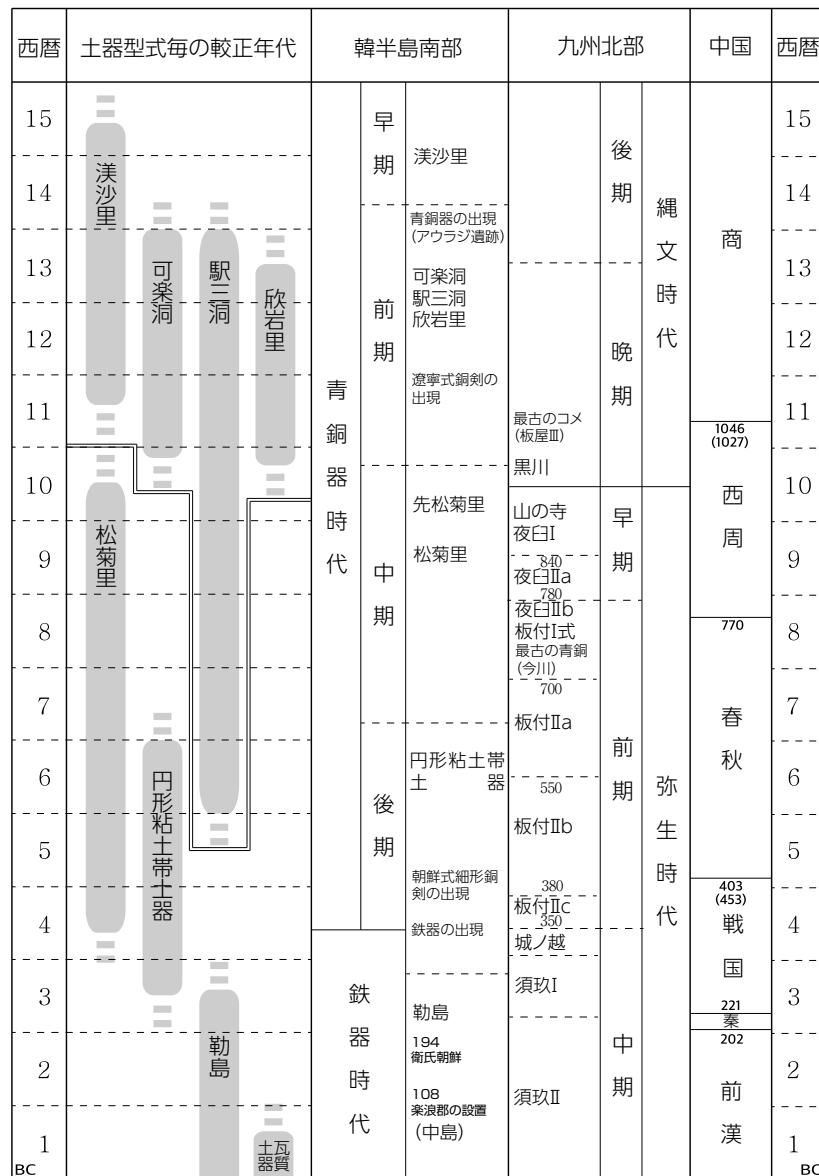


図5 韓半島青銅時代と弥生時代との併行関係及び暦年編年 [李昌熙 2017]

として持つ墓が見られないことの説明はできる。

前7世紀以降、韓半島南部では、多鈕粗文鏡、古式細形銅剣を代表とする古式朝鮮式青銅器文化の段階にはいる。武末の第2期に相当し、九州北部の前期中ごろ(板付Ⅱa式)に併行する。そしてこの段階の九州北部にも青銅器を副葬品に持つ人びとは存在しない。しかしこの時期になると、福岡県今川遺跡のように遼寧式銅剣の破片を研ぎ直して銅鏃としたり、加工具として再利用したりした青銅器片が見られるようになる。前段階と同様、九州北部には依然として青銅器を副葬品として持てるクラスの人びとが存在していなかった反面、青銅器破片の二次利用品が韓半島南部と同じように流通していたことがわかる。

九州北部に青銅器を副葬品として持つ人びとが出現するのは、武末の第3期に併行する前4世紀

後半の中期初頭になってからである。多鈕細文鏡、細形銅剣・銅矛・銅戈という武器形青銅器を代表とする青銅器である。福岡市吉武高木遺跡3号木棺からは、多鈕細文鏡の上に銅剣と銅戈を重ねて、被葬者の脇に副葬するという、韓半島南部と同じやり方で配置した被葬者が見つまっている。

九州北部には、灌漑式水田稲作開始後、約600年で、ようやく青銅器を副葬されるレベルに成長した有力者が登場したことがわかる。さらに3期は、本格的青銅器時代の開始と同時に、燕系の鑄造鉄器が登場する初期鉄器時代の開始期でもあった。

このように、灌漑式水田稲作が始まってから約600年間は青銅器を持てる有力者が登場しない期間であり、スクラップ利用の青銅破片を除けば基本的に青銅器が存在しない段階ではあったが、弥生社会自体が遼寧式青銅器文化の下に成立し、弥生前期は古式朝鮮式青銅器文化の影響を受けながら進展してきたことを考えると、青銅器時代に準じるという意味で初期青銅器段階にあったと考えてもよいのではないだろうか。

時期と地域は違うが同じようなあり方を示すのが長野である。銅鐸分布圏の外側に隣接することから弥生中期以降、青銅器破片が出土することが知られている。そして紀元前2～後1世紀（中期後半～後期初頭）になると、長野県中野市柳沢遺跡では銅鐸と銅戈14本が埋納された坑が見つかり、弥生青銅器祭祀の北限として知られていて銅鐸の分布圏からは遠く離れた所にある。一方、長野では紀元前2世紀には鉄器を加工した鍛冶遺構も見ついているので、初期鉄器段階のもとの青銅器祭祀として理解できよう。

### 3. ヨーロッパ銅石時代

ヨーロッパ最古の青銅器文明として知られているエーゲ文明以前が新石器時代である。そしてエーゲ文明に隣接する北ギリシャ、バルカン、中央ヨーロッパ、西ヨーロッパには銅石時代があるという。いわゆる金石併用期だがヨーロッパの場合は鉄器ではなく、石器と青銅器の併用を意味している〔中村 2002〕。

銅石時代はイタリアの考古学者によって石器時代と青銅器時代の間を設定された時代である。角田文衛によれば、原語は *eneolitico* だという。これをおそらく濱田耕作が金（属器）石（器）併用時代と訳した原語ではないかと角田はいう〔角田 1979〕。理由は、当時、日本の周辺に銅石時代がなく、日本でも新石器時代（縄文式土器の時代）の次に鉄石時代（弥生式土器の時代）がくるからである。ヨーロッパの銅石時代には、銅（青銅または鉄）の冶金術は知られているが、利器の多くはまだ石で作られていた過渡的な時代を指す時代概念だという。したがって独立した時代ではなく、中山平次郎の中間時代と同じく過渡的な段階を指す概念ということになる。

弥生早・前期には金属の冶金が始まっていないので、ヨーロッパの銅石時代の実態と完全に一致しているわけではない。松木武彦の言葉を借りれば、冶金という概念を知らない九州北部の人びとにとって、青銅器片を石器として認知し、石器製作技術で破面を研いで刃物を作る段階なのである。弥生人が青銅器として認識するようになるのは、青銅器鑄造が始まるまで待たなければならない。その時はじめて弥生人が認知的に明らかに新たな段階にはいるという<sup>(10)</sup>。すると弥生早・前期は金属との関係を見ている限りにおいては新石器時代末期という用語の方が、冶金以前であるという実態と整合性がとれるとも考えられる。

ただ韓半島南部においては紀元前 12 世紀（青銅器時代前期）には確実に遼寧式銅剣が副葬される段階に入っていることを考えると、この地域が青銅器を祭器・礼器と位置づける中国を中心とする東アジア青銅器文化圏に入っているとみてよい。このような青銅器文化に隣接する九州北部は、当然、その影響を受けていたことだろう。濱田耕作が銅石時代を鉄石併用の意味で金石併用期と訳した当時、弥生式土器の時代は秦・漢という鉄器時代に入っている地域の周辺地帯にあるという実情に合わせて金石併用期と訳したと推測されていることを考えると、現在、紀元前 10 世紀に始まっていることがわかっている九州北部の弥生文化は、遼寧式青銅器文化段階にあった韓半島南部に隣接する原義どおり銅石段階の影響下にあったと考えてもよいのではないだろうか。

## ⑥……………九州北部以外の地域の状況

### 1. 九州北部

本稿では、日本の先史時代のうち、縄文時代と、九州北部の弥生早・前期が、三時期区分法のどの段階に相当するののかという点について考えてきた。まずはここまでを整理しておこう。

まず九州北部の弥生早・前期だが、水田稲作の開始年代が 500 年あまりさかのぼったことを契機に、弥生早期～前期後半に比定されていた 34 点の鉄器は弥生土器との明確な共伴関係が確認できないこともあって、時期比定が出来ない鉄器としてすべて保留となった。その結果、弥生前期前葉から前期末までのおよそ 400 年間は、石器とわずかな青銅器破片の再利用品だけの段階であったことが明らかになった。また水田稲作が始まってから前期前葉までの約 200 年間は石器だけの段階でもあった。

両者をあわせた 600 年間はどのような段階に相当するののか検討を重ねてきた。その結果、九州北部玄界灘沿岸地域は、韓半島南部に遼寧式銅剣が出現する前 12 世紀ごろから遼寧式青銅器文化圏、多鈕粗文鏡と古式細形銅剣が出現する前 7 世紀ごろからは朝鮮式青銅器文化圏に隣接していた。そのため水田稲作開始以降は青銅器こそはもたないものの韓半島南部の人びとと副葬品の種類と組み合わせを同じくする一部の有力者層も存在した。

こうした 600 年あまりの状況はエーゲ文明の周りに存在した地域と同じ、銅石段階と考えられる可能性を示した。よって草原性新石器文化（選択型）ではなく、銅石併用段階という意味で初期青銅器段階にあったと考えた（図 6）。

次に前期末～前 108 年の楽浪郡設置までの九州北部は、多鈕細文鏡と細形銅剣・銅矛・銅戈を象徴とする朝鮮式青銅器文化の範囲に含まれる。これは燕系の鑄造鉄器に円形粘土帯土器を指標とする初期鉄器文化の祭祀的側面でもある。楽浪郡が設置されて以降は前漢や後漢を盟主とする東アジア青銅器文化圏に属する。

このように九州北部では西アジアや先史ヨーロッパのように青銅器が利器として発達するのではなく、青銅器が基本的に礼器・祭器として発達・盛行するという特徴をもつ。そのうち、朝鮮式青銅器文化や燕系の鑄造鉄器が出現する前期末以前の約 600 年間は、韓半島南部の遼寧式青銅器文化や多鈕粗文鏡を伴う韓半島青銅器文化（武末の 2 期）に隣接しており、しかも九州北部ではまだ青銅器の鑄造は行われていないので、銅石併用段階にある初期青銅器段階に相当すると考えた。

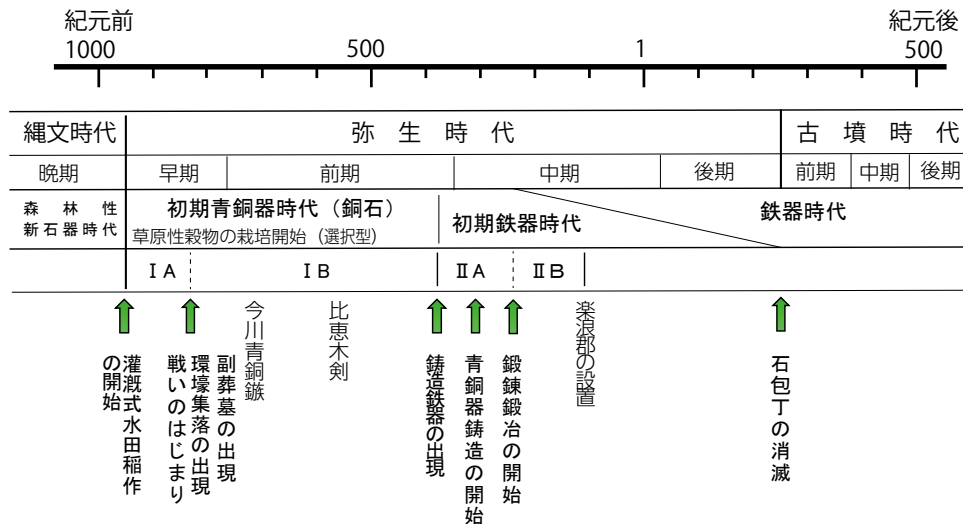


図6 弥生時代の時期区分案 (九州北部)

では九州北部以外の四国や本州は、灌漑式水田稲作が始まるまでは、どのような段階にあったと考えられるのであろうか (図7)。

## 2. 本州・四国

中四国、近畿、伊勢湾沿岸地域の西日本において選択的生業構造のもとで灌漑式水田稲作が始まったのは、紀元前8世紀末～前6世紀中ごろにかけてのことだが、それ以前は、九州北部で水田稲作が始まる紀元前10世紀ごろからアワやキビの栽培が草原性新石器文化の網羅的生業構造のもとで行われていたと考えられる。

中部・関東では網羅的生業構造のもとで板付I式に併行する紀元前8世紀ごろから堅果類などの採集に加えてアワ・キビ栽培を行う網羅型の草原性新石器文化段階にはいったと考えられる。そして紀元前3世紀中ごろに灌漑式水田稲作が始まり、草原性新石器文化 (選択型) 段階にはいる。紀元前2世紀以降には柳沢遺跡の埋納青銅器、鉄器の出現などを考慮すると、初期鉄器段階にはいると言えよう。

難しいのは東北北部である。九州北部と同様に水田稲作開始以前のアワ・キビ栽培の証拠は得られてなく、紀元前4世紀前葉に青森県砂沢遺跡で水田稲作が始まる。しかし水田の給排水方法や縄文晩期そのままの石器組成、土偶のまつりの存在などから、網羅的な生業構造の下で水田稲作が行われた唯一の草原性新石器文化 (網羅型) の例と考えている。林謙作も縄文以来の食料資源の一つにコメを加えただけで、システム自体は受け入れていないとした上で、縄文とも弥生とも言えない段階という意味で「エビ縄紋」段階にあったとしている [林 1993]。

一方、前3～前1世紀に行われた青森県垂柳遺跡に代表される水田稲作は、選択的生業構造のもとで灌漑式水田稲作が行われ、草原性新石器文化 (選択型) 段階にあった可能性があるが、それが社会や祭祀の質的变化につながった形跡は見られない。歴史的に次のステップに転回することなく、紀元前1世紀前葉に起きた降水量の増大にともなう気温の低下と大洪水により水田が埋没したこと



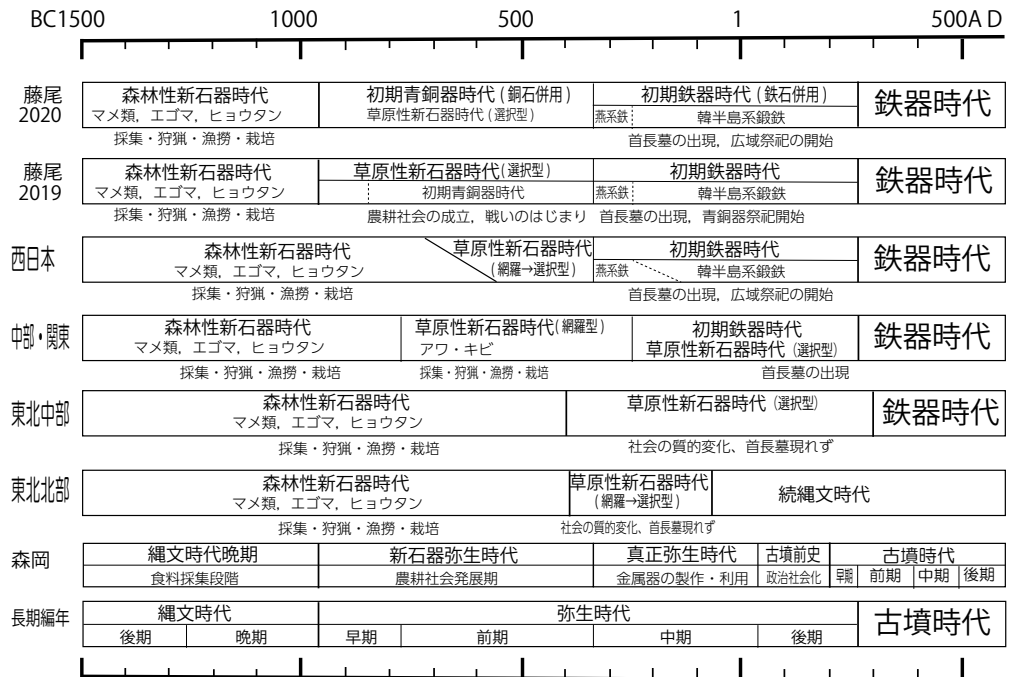


図 7 各地の弥生時代の時期別細分

で水田稲作を行えなくなり、南下してきた続縄文文化の圏内に入ったと考えられている。ただ、鉄器はわずかだが本州との交流によって手に入れていた可能性はあろう。

仙台平野など東北中部の草原性新石器文化は、アワやキビの栽培を網羅的な生業構造のもとで行う草原性新石器文化（網羅型）をへて、灌漑式水田稲作が紀元前 300 年代の内には選択的生業構造のもとで始まる。その後、社会や祭祀の質的变化を起こした形跡もなく古墳時代へと転回した唯一の地域である。

以上のように九州から本州にかけての地域では、縄文晩期までの森林性新石器文化から次の段階への移行についてはいくつかのパターンを見ることができた。まず、九州北部だけは森林性新石器文化からアワやキビを栽培する過程を経ることなく、紀元前 10 世紀後半に選択的生業構造のもとで水田稲作を行う初期青銅器段階へ転換する。もちろんアワ・キビ栽培などの他の穀物栽培を含む複合的な穀物栽培を行っているが、穀霊など農耕祭祀を含めてコメの生産量を上げることを究極の目的とするのが、遼寧式青銅器文化の生産基盤たる水田稲作の位置づけなのである。生産量の問題ではない。九州北部と東北北部を除く本州・四国・九州では、灌漑式水田稲作が始まるまでの間、何百年か網羅的生業構造のなかにアワ・キビ栽培が取り入れられた草原性新石器文化（網羅型）をへて、紀元前 7 世紀から前 3 世紀までに灌漑式水田稲作が始まることで草原性新石器文化（選択型）に転換する。最後に東北北部だけは、紀元前 4 世紀前葉に草原性新石器文化（網羅型）のもとで水田稲作が始まり、前 3 世紀に草原性新石器文化（選択的）段階の灌漑式水田稲作が始まるが、前 1 世紀前葉に起こった降水量の増大にともなう寒冷化と大規模な洪水によって水田は深く埋没してしまい、水田は放棄され、そのあと古代までこの地で穀物栽培が行われることはなかった。続縄文文化の世界となったのである。

### 3. 縄文時代と三時期区分法との関係

最後に縄文時代についてもみておこう。新石器文化を完新世の温暖化に伴って新たな動植物資源に適応した文化というチャイルド以前の原義通りに考えた場合、地域によって対象とした植物は生態系の違いにより異なるため、植物の特性に左右されて温暖化適応の内容は多様である。旧大陸には主にイネ・ムギ・アワ・キビなど一年生のイネ科植物を対象とした「四大文明」地を代表とする地域と、もう一つが多年生のドングリなどの堅果類を対象とした中緯度の北東アジアである。今村啓爾はそれぞれ、草原性新石器文化、森林性新石器文化と名づけた。

草原性新石器文化は次の歴史のステップへと進んだが、森林性新石器文化は堅果類の植物学的な特性のために次のステップに進むことはなかった。森林性新石器文化段階にあった本州・四国・九州は自立的に次のステップに進むことはなかったが、紀元前15世紀に本格的な畑作を開始して、紀元前12世紀に遼寧式青銅器文化複合体が成立、また前11世紀に遼寧式青銅器文化の生産基盤として水田稲作が始まった韓半島南部から、紀元前10世紀後半に韓半島青銅器時代人の移住を機に、九州北部がはじめて歴史の次のステップへと進むこととなった。

新石器時代を後氷期適応の結果だとすると、縄文早期以降が後氷期適応した新石器時代となり、さらに堅果類などの森林性食料の利用が活発化する縄文前期以降が典型的な森林性新石器文化となる。縄文草創期の約1.5万年前にもっとも早く森林性新石器文化段階に進んだ九州南部を除けば、縄文草創期は土器のある旧石器時代、縄文草創期以前の土器がない時代の旧石器時代は先土器時代、と考える今村の見解を支持したい。

## ⑦……………結論

2019年に鉄器出現以前のI期(弥生早期～前期後半：前10～前5世紀)を草原性新石器文化(選択型)と位置づけてきたが、以下の点から銅石段階という意味で初期青銅器時代に相当すると考えた。

- (1) 儀礼に用いる穀物や家畜の肉を得るために穀物栽培やウシやブタが飼育されていたブリテン島の前期新石器時代や、チャイルドが設定した畜養的耕作の西アジア新石器時代、アワ・キビ栽培を行う韓半島の新石器時代は、生業全体に占める穀物栽培や家畜の飼育の割合も補助的で網羅的な生業構造のなかに位置づけられているので、水田稲作が特化して選択的生業構造にある弥生時代の灌漑式水田稲作と同列に扱うことは難しい。したがって、少なくとも経済的観点からIA段階を草原性新石器文化(選択型)と定義するだけでは十分ではないと考えた。
- (2) IB段階の紀元前9世紀後半(早期後半)には福岡市雑餼隈遺跡にみられるように九州北部玄界灘沿岸の有力者たちは、遼寧式銅剣こそ保有できなかったものの、磨製石剣・磨製石鎌、副葬小壺という韓半島南部の有力者層と同じ組み合わせの副葬品をもつなど、韓半島南部遼寧式青銅器文化に属する有力者と同じ規範を有していた可能性がある。したがって、社会的・祭祀的にも銅石、初期青銅器段階にあると考えた。

(3) IB段階の紀元前8世紀末葉(弥生前期前葉)の九州北部には、遼寧式銅劍の破片を利用した銅鏃が登場するなど、韓半島南部に存在した青銅器破片の再利用システムが及んでいたと考えられるが、利器の中心が石器にあったことは言うまでもない。しかし、前6世紀に比定される比恵遺跡で出土した遼寧式銅劍を模して作られた木劍を儀礼の場で使っている可能性があることは、青銅器を利器として扱うのではなく礼器・祭器として扱う儀礼的な側面がすでに現れていると考えた。

これは九州北部が中国を中心とする東アジア青銅器文化圏のもっとも外側の世界に位置していることのあらわれである。

(4) 九州北部玄界灘沿岸地域の灌漑式水田稲作は、韓半島南部において遼寧式青銅器文化の生産基盤として行われていたものとして青銅器時代人によって持ち込まれた。したがって青銅器自体がまだ見つかっていない九州北部のIA段階も、遼寧式銅劍を象徴とする遼寧式青銅器文化複合体のもとにあるといっても過言ではなく、銅石段階にある日本の初期青銅器文化段階として位置づけられる。完形の青銅器はまだ出土していないが、水田稲作を行っていた人びとの考え方は、韓半島南部の人びとと共有されていたと考えられる。弥生時代はその当初から青銅器を祭器や利器として象徴する文化圏の影響のもとに始まったのである[春成1990]。その意味ですでに銅石段階という意味の初期青銅器時代に入っていたと考えたい。ヨーロッパ最古の青銅器文化であるエーゲ文明の最古段階も韓半島青銅器時代早期も青銅器が見つかっていないにもかかわらず、青銅器時代と見なす事例は存在するので、IA段階に青銅器が見つかっていないことが初期青銅器段階にあったことを否定する根拠とはならないと考える。

以上の理由から、九州北部玄界灘沿岸地域の弥生前期後半以前を銅石段階にある初期青銅器段階相当と考えることを提案する。

最後に、日本列島の中で水田稲作を受け入れなかった北海道と奄美・沖縄を除く地域の展開過程を、次の四つのパターンに分けて考える。

**A 九州北部** 縄文晩期まで森林性新石器文化だった九州北部では、灌漑式水田稲作を始めることによって初期青銅器段階にはいり、以降、初期鉄器時代をへて、鉄器時代(古墳時代)へと歴史的に転回する。

**B 西日本(東海以西)** 弥生早期前半併行期まで森林性新石器文化だった地域では、網羅的な生業構造のままアワ・キビ栽培を加えた草原性新石器文化(網羅型)をへて、弥生前期後半併行期までに選択的生業構造のもとで灌漑式水田稲作をおこなう草原性新石器文化(選択型)に転換する。その後、弥生中期以降、初期鉄器段階のもと青銅器祭祀を行い、鉄器時代(古墳時代)へと歴史的転回を遂げる。

**C 中部・関東** 森林性新石器文化から弥生前期初頭併行期に網羅的な生業構造のままアワ・キビ栽培を加えた草原性新石器文化(網羅型)をへて、弥生中期中ごろに選択的生業構造のもとで灌漑式水田稲作をおこなう草原性新石器文化(選択型)に転換する。この段階はすでに初期鉄器段階に

---

あり、その後、鉄器時代（古墳時代）へと歴史的転回を遂げる。

**D 東北中・南部** 森林性新石器文化から弥生前期末併行期までに選択的生業構造のもとで灌漑式水田稲作をおこなう草原性新石器文化（選択型）に転換する。弥生後期相当期にはすでに初期鉄器段階にはいつている可能性があり、その後、鉄器時代（古墳時代）へと歴史的転回を遂げるが、農耕社会としての質的変化を明確にしないまま古墳時代へ転回する唯一の地域である。

**E 東北北部** 弥生前期末併行期までに森林性新石器文化から網羅的生業構造のもとで灌漑式水田稲作をおこなう唯一の草原性新石器文化（網羅型）に転換する。その後、紀元前3世紀に選択的生業構造のもとで灌漑式水田稲作をおこなう草原性新石器文化（選択型）に転換するが、紀元前1世紀前葉に起こった降水量の増大に伴う寒冷化と洪水に遭い、水田が地下深く埋没した結果、水田稲作を行わなくなり、縄文文化圏内にはいる。

## おわりに

弥生時代が金石併用段階として始まったと理解された段階に、鉄器がどのくらい見つかったのかはわからないが、2004年の段階でさえ、弥生早・前期の鉄器の数は30数点に過ぎなかった。それでも金石併用段階と考えられた理由は2点あると考える。一つは、中山平次郎以来の研究史をふまえたこと、もう一つは戦国時代という鉄器時代にあった中国の周辺部で始まった時代であるという弥生時代の地理的な位置である。

本稿で、鉄器が出現する以前の段階を初期青銅器段階にあると考えたのは、弥生早・前期に比定される青銅器はまだ数点にすぎないという点よりも、遼寧式青銅器文化段階にあった韓半島南部の隣接地で成立した文化であるという地理的位置づけを重視したからである。また完形の青銅器こそ持っていないが、磨製石剣・磨製石鏃・副葬小壺という共通の組み合わせの副葬品を持つ有力者が、韓半島南部と九州北部玄界灘沿岸地域の双方に存在することが、同じ価値観を有する人びとの文化であったと見なせる点大きい。

九州北部の水田稲作は、酸素同位体比によれば前1千年紀の中でも最大の寒冷化を迎えたとされる前10世紀に、水田稲作が困難になった水田稲作民が九州北部に移住することで始まったというよりは、遼寧式青銅器文化のもとにあった青銅器時代人が、寒冷化と社会的矛盾の増大〔安 2009〕により、新たな新天地を求めて海を渡ったことによって、青銅器文化を経済的に支えていた灌漑式水田稲作が九州北部で始まる契機となったと考える方が、実態に近いのではないだろうか。

青銅器が利器として使われていないにもかかわらず、初期青銅器時代と考えるのは、弥生人の思想が韓半島南部の青銅器文化と意識的に同調していたからに外ならないと考える。

本稿は国立歴史民俗博物館基幹研究「日本の原始・古代史像新構築のための研究統合による年代歴史学の新展開—新領域開拓と研究発信—」（松木武彦研究代表）の成果の一部である。

註

(1)——実際、世界には新石器時代から直接鉄器時代へ移行する文化がある。日本やエジプトを除くアフリカなどである。新石器時代に停滞している間に、鉄の冶金技術が伝えられることで鉄器時代が継起するという〔角田 1979〕。ただ、この知見はいずれも弥生時代が農業の開始と鉄器の使用開始が同時に起こった時代であるという前提での話である。

(2)——ラボックについては佐原の以下の文献に詳しい〔佐原 1985〕。

(3)——水田稲作を始めたことで起こる社会の質的变化とは、たとえば縄文人がもっていた食料資源に対する考え方（資源観）、現世とあの世といった世界観、祖先に対する考え方（祖先観）などの精神面も含めて、180度大きく転換することを意味している。いや、むしろ、これらの考え方が転換しない限り水田稲作をおこなうことはできないともいえる〔藤尾 2003〕。環壕集落を造るということは新しい世界観に転換したことを示しているし、戦うということは、資源観が平準化機構から拡大再生産に転換したことも意味している。

(4)——縄文草創期や旧石器時代でさえ、日本に存在したとは考えられていない大正時代の話である。

(5)——アワやキビなど、他の穀物栽培の存在を否定しているわけではないし、コメの生産量自体が突出しているとか、ましてや弥生人がコメをもっとも多く食べていたことを意味しているのではない。灌漑式水田稲作を生活の基本に据えるという方針、意志の存在を意味しているのである。

(6)——戦前に行われた奈良県唐古遺跡の調査で、弥生前期に鉄器が存在した可能性を示す状況証拠が確認されている。なお現在、初期鉄器時代のはじまりは燕系の鑄造鉄器〔大沢 2004〕が出現する前期末（前4世紀前葉）に求められる。

(7)——角田は、ただ「式」を取っただけではなく、別物になったという言い方をしている。つまり時期区分から時代区分になったのである。

(8)——1985年に刊行された曲り田遺跡の報告には鍛鉄と報告されている。

(9)——2004年になると、弥生時代の鉄は、可鍛鑄鉄から始まることが明らかになっている。刃部に相当する部分だけ脱炭処理を施し、利器としての性能を増したもので、前6世紀の燕で始まった。

(10)——松木武彦氏との議論の中で教示をうけた。

参考文献

- 安在皓 2009：「松菊里文化成立期の嶺南社会と弥生文化」『弥生時代の考古学』2, pp.73-89, 同成社
- 石母田正 1962：「古代史概説」『岩波講座日本歴史』一 原始・古代1一, pp.1-75, 岩波書店
- 石川岳彦 2017：『春秋戦国時代 燕国の考古学』雄山閣
- 李昌熙 2017：「紀元前1千年紀の韓日関係」『再校！縄文と弥生』pp.40-71, 吉川弘文館
- 今村啓爾 1999：『縄文の実像を求めて』吉川弘文館
- 今村啓爾 2004：「日本列島の新石器時代」『日本史講座』第一巻, pp.35-63, 東京大学出版会
- 大沢正己 2004：「金属学的分析からみた倭と加耶の鉄 ―日韓の製鉄・鍛冶技術―」『国立歴史民俗博物館研究報告』第110集, pp.71-82.
- 甲元眞之 1991：「東アジアの初期農耕文化 ―自然遺物の分析を中心として―」『日本における初期弥生文化の成立』pp.553-613, 文献出版
- 佐々木高明・木村利夫編 1988：『畑作文化の誕生 ―縄文農耕論へのアプローチ―』pp.347-350での発言。
- 佐原 真 1975：「農業の開始と階級社会の形成」『岩波講座日本歴史』1 一 原始・古代1一, pp.114-182, 岩波書店
- 佐原 真 1982：『弥生土器Ⅰ・Ⅱ』ニューサイエンス社
- 佐原 真 1985：「ラボック・トムセン・シーボルト・モンテリウス詣で」『論集日本原史』pp.835-863, 吉川弘文館
- 設楽博己 2004：「AMS 炭素年代測定による弥生時代の開始年代をめぐって」『歴史研究の最前線』1, 総合研究大学院大学・国立歴史民俗博物館
- 杉原荘介 1961：「日本農耕文化の生成」『日本農耕文化の生成』pp.3-33, 東京堂
- 武末純一 2002：「弥生文化と朝鮮半島の初期農耕文化」『古代を考える ―稲・金属・戦争―』pp.105-138, 吉川弘文館
- 角田文衛 1959：「弥生時代の時代区分 ―末永雅雄博士に捧ぐ―」『古代学』第8巻第3号, pp.258-275, 古代学協会
- 角田文衛 1979：「新石器時代」『世界考古学事典』上, pp.538-539, 平凡社
- 中村友博 2002：「石器から金属器へ」『古代を考える ―稲・金属・戦争―』pp.139-166, 吉川弘文館
- 中山平次郎 1917：「北部九州に於ける先史原史両時代中間期間の遺物に就いて」『考古学雑誌』7(10)-8(3)

- 
- 禰津正志 1942:『アジア文明の起源』科学文化論叢 18, 誠文堂新光社  
濱田青陵 1948 (1922):『通論考古学』第2版, 全国書房  
林 謙作 1992:「縄文時代史 12」『季刊考古学』38, pp.97-104.  
林 謙作 1993:「クニのない世界」『みちのく弥生文化』大阪府立弥生文化博物館図録6, pp.66-76.  
春成秀爾 1990:『弥生時代の始まり』UP 考古学選書 11, 東京大学出版会  
春成秀爾 2004:「弥生時代と鉄器」『国立歴史民俗博物館研究報告』第133集, pp.173-198.  
藤尾慎一郎 1988:「縄文から弥生へ —水田稲作の開始か定着か—」『日本民族・文化の生成 1』pp.437-452, 六興出版  
藤尾慎一郎 2002:『縄文論争』講談社メチエ  
藤尾慎一郎 2003:『弥生変革期の考古学』同成社  
藤尾慎一郎 2008:「日韓青銅器文化の実年代」『東アジア青銅器の系譜』新弥生時代のはじまり第3巻, pp.138-147, 雄山閣  
藤尾慎一郎 2019:「弥生長期編年にもとづく時代と文化」『再考! 縄文と弥生 —日本先史文化の再構築—』pp.159-185, 吉川弘文館  
森岡秀人 2004:「農耕社会の成立」『日本史講座』第1巻 —東アジアにおける国家の形成—, pp.65-100, 東京大学出版会  
森岡秀人 2007:「弥生時代の中にみられる画期」『季刊考古学』100, p.51, 雄山閣  
森岡秀人 2008:「用語「弥生式石器時代」の学史的復権と武器の材質」『王権と武器の信仰』pp.577-587, 同成社  
森岡秀人 2018:「近畿初期農耕社会の成立にみられる諸変動と画期」『初期農耕活動と近畿の弥生社会』pp.281-295, 雄山閣  
森本六爾編 1929:『日本青銅器地名表』, 岡書院  
森本六爾 1934:「農業起源と農業社会」『考古学評論』1-1  
山内清男 1932:「日本遠古之文化 (五)」『ドルメン』1 (8), p.60.  
山崎真治 2017:「南島爪形文土器以前の土器を探る」『沖縄の土器文化の起源を探る』沖縄考古学会 2017 年度研究発表会資料集, pp.34-43, 沖縄考古学会  
和島誠一 1967:「弥生時代社会の構造」『日本の考古学』Ⅲ, pp.1-31, 河出書房  
G. チャイルド 1936: *Man makes himself*. WaHc & Co. London.  
J. トーマス 1991: *Rethinking Neolithic*. Cambridge University Press.

(国立歴史民俗博物館研究部)

(2020年12月11日受付, 2021年5月24日審査終了)

---

## **A Proposal of the Pre-Bronze Age of the Yayoi Period : The Yayoi Period Before the Appearance of Iron Tools**

FUJIO Shin'ichiro

The purpose of this paper is to think whether from the initial Yayoi to the latter half Yayoi consisting of the stone tools and secondary product of a slight bronze tools corresponds in the Neolithic Yayoi period defined by Hideto Morioka.

We have thought that the Yayoi period is in the metal stone combination stage from the time of the start, and develops to the pre iron tool stage and the iron tool stage afterwards.

However, in 2004, when it became clear that iron tools appeared at the end of the early Yayoi period, 600 years after wet rice cultivation began, Hideto Morioka thought that from the initial yayoi to the second half of the early Yayoi, when only stone tools were used, corresponded to the Neolithic period, and named it the Neolithic Yayoi period.

I think Morioka's theory is not appropriate for the following reasons. That is, the wet rice cultivation with the irrigation system done under the selective subsistence industry structure is not the same as the foxtail millet and millet cultivation in the southern part of the Korean peninsula Neolithic age done under an comprehensive subsistence structure.

It was the Bronze Age that wet rice cultivation with the irrigation system was carried out under selective subsistence structures in the southern part of the Korean Peninsula. Since the Bronze Age in Japan is thought to begin in the middle Yayoi, the initial and early Yayoi period was never considered the Bronze Age.

Then, what age does the initial and early Yayoi where the bronze tools used secondarily is slightly accompanied by the stone tools, and rice cultivation is done in the selective subsistence structure correspond to what age?

In Europe, stone tools and bronze tools were used together at the end of the Neolithic period. Or, because it is known to be called the copper stone age which means that metallurgy technology is not known yet, I came to think that the initial and early Yayoi corresponded to the pre bronze tools stage.

Wet Rice cultivation in Japan began in northern Kyushu, adjacent to the southern part of the Korean Peninsula, which belonged to the Liaoning bronze tools culture. We can see a number of archaeological evidence showing that there were people who worshiped bronze tools in the coastal area of the Genkai Sea, where the Liaoning bronze sword had not yet been found.

---

Therefore, the Yayoi period began as a pre bronze tools stage in northern Kyushu, adjacent to the southern part of the Korean Peninsula, which belonged to the Liaoning bronze tools cultural sphere. And it was thought that it shifted to the pre iron tools stage at the end of the early Yayoi and the iron tools stage in the latter half of the middle Yayoi period.

Key words: Neolithic Yayoi period, early Bronze tools Yayoi period, Iron tools Yayoi period, comprehensive subsistence structure, selective subsistence structure.